一般口演（多領域専門職部門）

一般口演（多領域専門職部門）3
周術期・集中治療における支援－1

座長:荒木田 真子 (東京女子医科大学病院)
Sat. Jul 18, 2015 1:30 PM - 2:15 PM 第7会場 (1F シリウス)
III-TRO-11～III-TRO-15
所属正式名称：荒木田真子(東京女子医科大学病院　看護部)

[III-TRO-14]心臓血管外科手術後小児患者に対する改変版 State Behavioral Scale (SBS)の妥当性

○宗川 一慶, 永留 隼人, 長尾 工, 岩塚 明美 (榊原記念病院　ICU)
Keywords:SBS, 鎮静スケール, ICU

【背景・目的】 State Behavioral Scale (SBS)は0～7歳で挿管中の患児を対象とした鎮静・不穏スケールであり、近年日本語版 SBSの検証が行われている。今回、心臓血管外科手術後小児患者を挿管中・非挿管中に区分しSBSの妥当性を検証した。【対象者】2014年10月～2015年1月の期間で心臓血管外科手術後、 ICU管理下にある0～7歳の患児を対象とし、「筋弛緩薬投与中」「術後意識障害を疑う症例」を対象除外基準とした。【方法】ICU入室から4時間毎と追加鎮静時に Visual Analog Scale(VAS)と SBSの同時評価を行った。評価期間は調査開始日から ICU退室まで、または最大3日間とした。なお VASを-5(反応なし)～+5(不穏)の11段階に定義した。SBSは-3(反応なし)～+2(不穏)の6段階で使用した。【結果】101名の患児に対して1484回の評価を行った。平均月齢は16ヶ月±19.8ヶ月、 Risk Adjustment for Congenital Heart Surgery(RACHS-1)の平均 Scoreは2.6±1であった。 ICU滞在期間中の挿管平均時間は2093分±4023分であった。非挿管平均時間は1465分±1088分であった。各対象者の VASと SBSの平均 Scoreは、挿管中は VAS-2.3±1.6・ SBS-1.5±0.9であり、非挿管中は VAS-0.1±1・ SBS0±0.7であった。挿管中の VASと SBSは r=0.92(p＜0.01)で正の相関を示した。また一元配置分散分析では SBS各 Scoreに対する VAS Scoreに対して有意差を認めた(p＜0.01)。非挿管中での VASと SBSも正の相関（ r=0.89、 p＜0.01）を示し、一元配置分散分析の結果も挿管中と同様であった(p＜0.01)。なお１歳未満、1～3歳、4～7歳の3つに区分し検定を行ない、全てで正の相関を認め(r=0.86～0.94、 p＜0.01)、一元配置分散分析で有意差を認めた(p＜0.01)。【考察】 SBSは挿管・非挿管に関わらず鎮静・不穏状態を評価できる有用なスケールであった。今後は信頼性の検証に加え、患児属性を分析した上で検証をしていく必要がある。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery